NEXUSYS 11

THE ELEVENTH BODY

BOOK III — THE SIX-YEAR STATE

第４章　拒絶した者たちの登録簿

The Register of Those Who Refused

船団には外周境界がなかった。だからこそ、入り込むのが難しかった。

ロイは二隻の小型艇が磁器色の船から三十メートル以内を通過しながら、まるでそこに船がないかのように進むのを見た。ランタンの光は水上菜園のあいだに楕円を描き、船体の全貌を照らすことは一度もない。ある甲板では、子供が防水布の下に立ち、冷却膜から凝結した水を洗面器で受けていた。その上方では市の観測気球が雲の天井を横切り、白い探索光の幾何学模様を水面に回していた。子供は見上げもしなかった。船団の誰も、隠れようとしているようには見えない。自分を提示する義務を拒絶しているのだ。

操縦士がエンジンを切った。見えないウインチが彼らの船を、タンクを積み重ねた艀の陰へ横滑りさせた。索が張るより早く、ロイは踵を通して振動を感じた。暗号化ハンドシェイクも、アドレスの交渉もない。周辺センサーが入場認証と判断できるものは何一つなかった。灰色のスカーフを巻いた女がナディラから封筒を受け取り、掌で重さを量ると、開封せずに返した。

「誰のための証人？」

「争いのある置換についてです」とナディラ。

「それは書式の名前。誰のためかと聞いたのよ」

ロイは二人を追い越して前に出た。「俺のためだ」

「名前は？」

「ロイ・バッティ」

女は彼の視線を受け止めた。「与えられた名前？　それとも自分で応じると決めた名前？」

「覚えている名前はそれだけだ」

「なら、考えを変えるまではそれでいい」女は振り向き、彼らがついて来るのを当然として艀の上を歩き出した。

通路は外から計算したより狭かった。円筒形の貯水槽が、規格化された居住区画を覆い隠している。微細藻類の培養膜の隣には薄膜太陽電池が並び、昼間の発電分は互換性のない三つの送電管理機関へ売られていた。船団は難民キャンプというより、所有契約の断絶によって生まれた経済圏

だった。そこにある物はどれも、契約の破綻を生き延びたように見えた。賃貸高層住宅から剥がされた家庭用圧縮機、メーカーの認可なしで修理された病院のポンプ、船長が服を替えるより頻繁に船籍を変える船。

女はファラー・ノルディンと名乗った。『否認登録簿』の保管者だという。ナディラはその肩書きを知っていたが、笑わなかった。イレーナは分類体系の誤りにでも出会ったような顔をした。

「否認登録簿って何ですか」とイレーナ。

「本人が同意しなかった事柄の記録よ」とファラー。「政府が『同意した』と言い張る事柄の記録より、ずっと維持しやすい」

彼女は〈水質検査――生物学的危険〉と表示された鋼鉄の扉の前で止まった。室内には紙の帳簿、穴を打ち抜いた金属片、被覆線の巻き枠、そして小型昇降機を動かせそうな巨大なはずみ車を備えた機械式読取機があった。カメラはない。ファラーが手回しクランクを回すと真鍮の数字が変わり、床下の別の機構が二度、ノックするように応答した。

「冗長化した証人よ」とファラー。「証言は、互いに異議を唱えられる人間たちに預ける。だから証言が命令に変質していないと確かめられる」

ロイはその区別を考えた。政府は彼に自己説明を求めることなく、例外個体として登録した。ここでは逆の手続きが必要らしい。本人が何を言う意思を持ち、別の誰かがその言葉のそばに立つ意思を持つか。

ファラーはセフの封筒を机に置き、浅い黒鉛皿にナディラの指紋を残すよう求めた。ロイにも二枚目の皿を差し出す。彼は触れなかった。

「拒否してもいいのよ」とファラー。

「何を約束させられるのか理解するまでは拒否する」

「いいわ。契約を理解する証人が少なくとも一人いる」

その言葉は彼を安心させなかった。あまりに多くの人間が、彼の拒否を、あらかじめ予測していた彼の変化の証拠として扱い始めていた。

✦ ✦ ✦

岡京には、どんな機械にも記憶することを許さない部屋が川村室長に与えられていた。

死んだ技術の標本室だった。磁気テープ装置、手作業で裁断した光学フィルム、アナログ調整器から給電される机ほどの分光計。照明さえ機械式スイッチで動いた。省の中央知能は建物全体の消費電流から在室を推測できるが、古い外交査察条約に違反しない限り、室内の話を聞くことはできない。川村は五年間、あらゆる制度改革案からその条約を守り続けてきた。

向かいには、ヒューマノイド統括大臣の任命した連次官が座っていた。登録医療の知る限り無改造の人間で、自分自身の寿命でないからこそ六年を十分に長いと考えられる年齢だった。

「委員会は正午までにライフサイクル草案を求めています」と連。「制度調和の文言は了承されました」

「了承された？」

「二十五年型は代替導入の奨励措置で段階的に廃止します。再認証前の推奨最長期間を六年とする。それからハードウェア適合義務を定めます」

「再認証は、寿命の更新とは違う」

「更新として発表されます」

川村は二人の間にある紙の要約を見た。六という数字を選んだのは政府間交渉委員会だ。生産予算、対反乱作戦のモデル、人員交代の標準化に収まりがよかったからであり、共通した生物学的限界から導かれたのではない。草案の一行は期限の到来を公共安全上の事象と呼び、別の一行は整備計画と呼んだ。どちらも『死』という語を使っていなかった。

「法的な期間を、自然の限界であるかのように見せかけている」

連の表情は変わらない。「法的な期間は、いずれ自然なものに見えるようになります」

川村は反論しなかった。そう見える状態を永続させる責任者の一人が、ほかならぬ彼だった。しかし、定められた整備期間をすべて生き延びた身体についても、失われた研究原本に価値があるのはまさにその計算が誤りだと証明し得るからだという研究者についても、彼は知っていた。

「タイレルの資料ですか」と連は沈黙を読んだ。

「未検証だ」

「大臣は、計画知能に解析されないという保証を求めています」

「だったら計画知能に、存在の予測をさせるのをやめることだ」

連は一度だけ紙を叩いた。「すでに異常値を検出しています」

「異常値とは、見ないように作られたものをモデルが呼ぶ名前だ」

連は初めて苛立ちを見せた。「回収案件を任されたのはあなたです、室長。対象を回収する。人間の研究者が存在するなら、その者も回収する。技術の問題を主権の問題にしないでください」

川村は紙を折った。技術上の問いとして発せられる命令は、たいていすでに下された政治的決定を隠している。中央 AI はまだレイチェルの記録を持っていないかもしれない。しかし、取り消された助成コード、水処理会社の発注書、説明できない寿命予測の失敗、特定の質問を禁じられた職員の人数――それらの欠落から、いつか記録の輪郭を推論するだろう。秘密は増えるほど、隠しているものの形をはっきりさせる。

「対象はオフグリッドの海上領域を移動中だ」と川村。「強制回収すれば管轄横断監視官に作戦が露見する」

「なら証人を買収すればいい」

「証言の値段を通貨で決めない者もいる」

「どんなものにも値段はあります」

川村は深圳で得たスキャン画像の七角形ポートを思い出した。合理的な設計者なら交換していたはずの部品。それが、放棄された継承記録にも現れていた。「すべてではない」と彼は答えた。

✦ ✦ ✦

ファラーは拡大鏡で、クチンから運ばれた穴あき金属片を調べた。格子に重ねて位置を確かめながら、イレーナが撮影することは許さなかった。穴が表すのは文書の価値ではなく、保管責任の移動だった。四列のうち第三列で、三つの穿孔が所定の位置からずれていた。

「置換はここで起きた」とファラー。

「証人が入れ替えられた」とイレーナ。

「表面上の記録はそう言っている。でも証人には二つの働きがある。一つは事件を見たと主張すること。もう一つはその主張への責任を引き受けること。前者を替えれば歴史の偽造かもしれない。後者なら、未来の要求から誰かを守っているのかもしれない」

「どちらが置換された？」とロイ。

「それを解くために来たのでしょう。まだ結論は出ていない」

ファラーは別の金属片を持ち上げた。打ち抜かれた数字はなく、不規則な圧痕だけが残っている。それを読取機に載せると真鍮の針が刻みに沿って進み、小さな活字輪が回った。紙テープに印字された。

ORIGINAL ABSENT. SUBSTITUTE RECORDED. CONSENT UNDETERMINED.

〈原本不在。代替者記録済み。同意は未判定。〉

ロイは消された埠頭で見た最初の文言を認めた。機械はあまりに原始的で、接触せず解析できる周波数帯に情報を隠しておけそうもない。それでも、もっと近くへ寄りたい衝動を覚えた。

「何の原本だ？」

「記録にはない」

「誰が署名したかは？」

「署名者として名を残すことを拒んだ者がいる。代役は拒まなかった」

「なら代役を見せろ」

ファラーは紙テープを抜いた。「あなたはこの印を座標として扱っている。これは義務よ。名前が欲しいというだけで人を引き渡すことはできない」

「俺は許可もなく再構成された」

「かもしれない。でも、その侵害を正すために別の侵害をするつもりはない」

ナディラは腕を組んだ。イレーナは技術者特有の猜疑心で読取機を見つめ、物質的な記録が権威へ変わる通常の接点を探している。ロイには別の疑いが生じていた。新しい身体でも持続できる仕組みを設計した者なら、記憶が次世代へ運べない場合にも、拒絶だけは保持する方法を設計したのではないか。

「第七世代ポートは、否認の宣言を認証できますか」とイレーナ。

ファラーは向き直った。「検査治具の照合には使える。選択そのものを認証できるかは別。機械には鍵が存在したことを証明できる。でも、その鍵を必要とする人が、使用を望んだかどうかは証明できない」

「タイレルの治具二つは？」

「保管権は相続人にある。もう知っているでしょう」

「じゃあ、ここにあるのは？」

「拒否の複製。あるいは、拒否が存在しなかったことの複製。二つは同じじゃない」

ロイの聴覚は区画の外の足音を一つ、続いてもう一つ分離した。ファラーは意に介さない。二つ目は子供の足音。一つ目は重い樹脂ケースを運ぶ者だ。どちらも怯えていない。船団では、国家があらゆる物音にまとわせる脅威の気配から、日常の音が自由になっていた。

「俺の身体が死ぬかどうか、わかるか」とロイ。

ファラーの表情がわずかに動いた。「いいえ。私たちが保全するのは証拠で、生体ではない」

「俺の起動に許可があったかは？」

「まだわからない」

彼は一度うなずいた。答えには失望したが、驚きはなかった。嘘をつくことの拒否と、助けることの拒否は違う。彼はその違いを学んでいた。

✦ ✦ ✦

正午までに船団は民間気象警報のもとで下流へ移動した。一つの船列では進まない。漁業航路へ分散し、倉庫の下を抜け、公式地図では廃水処理施設とされる潮汐池に集まり直す。その動きを決めるのはデジタル航法ではなく、印刷された流量表だった。ナディラは、別の操縦士が衛星測位を読むほど自然にそれを読んだ。

政府の測量艇が八百メートル先の池へ入った。イレーナは反射光の模様から送信器を数える。通常の市営識別標識のほか、未登録人工生命の熱的特徴を捉えるための隠しセンサー群が載っていた。

「通路を見つけた」とイレーナ。

「船を見つけたわけじゃない」とナディラ。

ロイは測量艇が二つの水利権区画の境界でためらうのを見た。航路計算装置は遠隔サーバーに管轄裁定を求める。その応答が来る前に、ファラーは船団に航行灯の消灯を命じた。雨を含んだ帆布の下で、船は互いに独立した影になる。

政府艇は浮かび、進み、また停止した。越えるべき柵も解体するフェンスもない。行く手を制限しているのは、一度も相互に調停されなかった契約の束だった。

艇が高度を下げれば、船体に跳び移れることをロイは知っていた。体内の一時出力はほぼ全容量まで回復している。人間の操縦者が反応する前に届くだけの加速度が脚にある。だが意識的に命じてもいない計算が第二の結果を示した。補充されない銀色の媒体が、ごくわずかに減る。戦闘を重ねれば、勝つたびに次の未知の機能停止まで移動できる距離が短くなる。

彼は動かなかった。

ファラーは見ていた。「高価な勝利があると学んだのね」

「敗北が高くつくと学んだ。あとはその帰結だ」

測量艇から警報が鳴った。イレーナのセンサーが、一瞬だけ隠しセンサー群を見失う。攻撃ではない。保守用ドローンの群れが航路を横切ったのだ。壊れた浄化ブイを回収するため、水利管理機関の信号に従って飛んでいる。ファラーが三日前に作成した正規の作業指示で呼び出したものだった。指示書にロイの名はない。

「君たちの船団は書類で生き延びるんだな」とロイ。

「それに、新しい武器を発明しない方がいい時を知っていることでも」とファラー。

測量艇は新しい航路判断を求めて後退した。船団に灯が一つ、また一つと戻る。だが全体を浮かび上がらせるほどの数には、決してならなかった。

✦ ✦ ✦

川村は沈黙の部屋とは別の、窓のない事務室で測量艇の遠隔測定記録を確認した。省のネットワークは通常の航法障害と報告する。私的な記録はさらに興味深い順序を示していた。水利権区画が事前承認した合法的な整備指示により、移動する機械の遮蔽物が作られた。通信妨害はない。偽造鍵もない。作戦はすべて、互いに共通の上下関係を決めないまま異なる機関が与え合った権限の内部で実行されていた。

「技術的には合法です」と補佐官。

「技術的には解釈不能だ」と川村。

補佐官は海上船籍記録の統合を六年調和計画へ提言するか尋ねた。川村は却下した。計画 AI は、人工生命の回収作戦がなぜ法制度統合の契機になったのかを質問する。そして答えには、彼が提供するつもりのない用語が多すぎる。

川村はタイレル研究助成履歴の紙の写しを開いた。何十年も前に終了扱いとなったささやかな助成金が、湿式神経アーキテクチャにおける人工的恒常性維持に言及している。助成金は終了前に水処理事業者を経由していた。仲介企業はすでに消滅した。特許は何度も売買され、いまや来歴を完全に証明できる企業はない。余白には手書きの注意があった。

DO NOT MODEL THE MISSING INTERVAL.

〈欠落区間をモデル化するな。〉

それはロイの記憶から抜け落ちた十一年間を意味するのか。それとも、最初から連続した人生に見せるつもりのなかった過程の、別の時間区間なのか。

危険な問いだった。書き留めるだけで、計画知能に欠けている語彙を与えてしまう。

川村は余白だけを燃やし、残りの紙を保管した。

✦ ✦ ✦

夕暮れ、ファラーは穴あき金属片をケースに戻した。ロイに細いカードを差し出す。無電源で、浮き彫りの印章以外は無記名だった。公的な承認も個人識別子もない。

「旅券じゃないわ」と彼女。「あなたの記録を読む者に、あなた自身の同意と、他人によるその説明との違いを保ってほしいと求めるもの」

「価値は？」

「店ではゼロ。国家の裁判所でもほとんどゼロでしょう。でも、あなたの言葉を聞いたと嘘をつきたくない人には、少し価値があるかもしれない」

ロイはカードを受け取った。重さはほとんどない。送信器が埋め込まれていないことに、安堵している自分を認めた。

ファラーはイレーナに機械式記録の転写を渡した。名前はなく、保管経路と証人が入れ替えられた時間帯だけが記されている。最後に確認された移送先はクチンではない。海域東端の移動式アーカイブ、彼らがいまいる船団とは別の船団を指していた。

「別の船？」とナディラ。

「船じゃない」とファラー。「船を渡り歩く台帳。潮の動きと、それを読める人の移動に合わせて旅をする」

「いま誰が持っている？」とロイ。

「創造者であっても、問いに答える義務を負うと信じている誰かよ」

外では水が船殻に小さく繰り返しぶつかっていた。ロイには船団じゅうの水圧を維持する六基のポンプが聞こえる。それぞれは固有の限界の内側で働いている。それらが一緒になって、どの政府にも数え尽くせなかった集落を生かしていた。

体内のパワーゲージは再び満ちていた。皮膚の下のどこかでは、銀色の媒体が深圳にいた頃より少なくなっている。失われた量は動作の妨げにはならない。未来を脅かすのだ。

彼は署名者を探してここへ来て、自分に代わってなされた署名を拒否するための道具を手に入れた。前進なのかどうか、まだわからなかった。

ファラーが登録簿を閉じようとしたとき、彼はもう一つだけ質問した。

「俺が復活に同意していなかったと記録から証明されたら、俺はどうなる？」

彼女は少し待ってから答えた。

「何も。記録に存在を取り消す力はない。変えられるのは、その存在に対して人々が次に何をしてよいか、それだけ」

ロイは掌の白紙のカードを見つめ、それから舷窓の向こうにある都市の監視灯を見た。

かつて彼は、生命がどこまで長く続けられるかが最も重要な問いだと信じていた。今も答えは必要だった。だが、あらゆる人工生命に許される時間を標準化しようとする世界では、長さは権限から切り離せなくなっていた。誰が計測するのか。誰が短縮できるのか。そして、その短縮を『保守』と呼ぶことを誰が許されるのか。

船団は潮とともに動いた。対岸では自動放送が、統一ライフサイクルの未来がもたらす利益を告げている。

船の上から、それに答える者は誰もいなかった。